

## 「ヒューマノミクス」——その提案と想い

岡 部 光 明

ヒューマノミクスとは、人間性経済学、つまり「人間の本質的な要素を十分に取り込んだ経済学」という意味である。現代の主流派経済学は残念ながらそのような視点を十分備えていないが、それはなぜか。今なぜ人間性経済学が必要なのか、自分はそれをどう目指してきたのか、そして、自分のその研究プロジェクトが一段落した今どのような想いを抱いているのか。以下、これらを綴ってみた。

### 一・主流派経済学の強さ

主流派経済学（新古典派経済学）は、個人の経済的行動を基礎に置き、それをもとに社会全体の動きや公共政策を論じるといふ研究方法を採る点に特徴がある。すなわち、ここでは、個人は所得制約のもとで消費を拡大することに よって効用（満足度）を最大化するという理解を出発点としている。

そして、個人のそうした行動は、今期だけでなく、来期以降も生涯に亘って続くとされ、現在から将来に亘る各期の効用の総合計（積分値）を最大化するように行動する主体である、という理解と定式化がなされる。こうした理解は、個人の行動として数学的に定式化し易いだけでなく、社会もそうした個人の算術合計に他ならないと理解するた め数学的に扱い易い。こうしたことから、このような社会観は「ミクロ的基礎を持つマクロ経済学」あるいは「方法論的個人主義」に立脚した経済学と称され、主流派経済学の一つの大きな流れを形成している。

逆に言えば、そのような定式化を提示していない経済学論文は「ミクロ的基礎がない」と批判されるので、研究者はそうした定式化を必須と理解して論文を書く場合が多い。ちなみに、日本経済学会の機関誌（英文論文誌）の二〇一八年六月号には六編の論文が掲載されているが、統計分析等を扱った二編を除く四編の論文をみると、それらのテーマは「出生率の地域間差異と経済取引」「公害による生命の危険と経済成長」など多様なことから対象としている。しかし、それら四論文では、何と、いずれも上記のような個人効用関数を用いて議論がなされている。確かに、学問の手法としてはすっきりした印象を与える。しかし、そこには後述するように大きな問題が潜んでいる。

なお、近年注目度が高まっている「行動経済学」は、やや毛色を異にする。すなわち、人間の行動を上記のように前提するのではなく、現実の行動自体の観察（心理学など）をもとにして公共政策などを提案する経済学の一分野である。例えば、コロナ・ウイルスの感染防止対策として重要な「手のアルコール消毒」を推進する場合、単に建物の玄関にその容器を置くだけでなく、人の足跡をデザインしたガムテープを建物の入り口からその容器の場所まで床に

貼り付けた場合には、実際にアルコール消毒をする人が増える。このことが多くの事例で確認されている。そして行動経済学の研究者は、このような政策を提言できるので大いに有用性があると主張している。

ただ、行動経済学には倫理性が欠如しているという批判も少なくない。例えば、アメリカでは大手食品企業が消費者の砂糖、塩、脂肪に対する渴望を最大化させる条件を計算して販売戦略をとる結果、ポテトチップやフライドポテトなど（塩分と脂肪）の過食やコーラ（砂糖水）のガブ飲みを発生させている。こうしたことから、アメリカ人全体の何と三六%が肥満に陥っている。<sup>(注二)</sup>競争市場では、このように誠実とは言いがたい行動を促す圧力が奨励される可能性もある。<sup>(同)</sup>

## 二、経済学は人間性をよりの確に取り込む必要

主流派経済学であれ、行動経済学であれ、確かに上記のような「強さ」ないし「有用性」がある。しかし、こうした研究方法に依存する経済学者は、経済学界の内部で評価されるかもしれないが、他の多くの学問領域からみた人間観に照らすと、人間の理解が著しく偏っているのではないか。これが、ここ二〇年来の筆者の問題意識である。つまり、主流派経済学における人間像（経済人、ホモ・エコノミカス）は、数学的処理に際して便利であるものの、二つの点でもあまりにも単純に過ぎるのではないかと筆者は考えている。

第一に、主流派経済学では、人間は生涯を通じて単純に消費の拡大を目的とする存在としての人間を前提しているが、経済以外の多くの学問領域（心理学、社会学、倫理学、哲学など）においては、経験的にも理論的にもそれよりはるかに豊かな人間観、とりわけ人間は「幸福」ないし「ウェルビーイング」を追求する存在であることが主張さ

れ、そうした理解で学問研究が進められていることに注目する必要がある。

むしろ「幸福とは何か」を課題とすれば、その深さの度合い、持続性、そしてそれらの種類などに関する議論が必要となる。しかし、例えば米ハーバード大学には七二四人を対象に七十五年間にわたって全員の人生を追跡した驚異的な研究がある。ここでは、良い人生を決定したのは、所得や資産あるいは名声ではなく、「良い人間関係」であることが明確に結論づけられている。<sup>(注三)</sup>つまり、人間の行動動機は、短期的に捉えても人生を通して捉えても、それは消費量の増大だと定式化する主流派経済学の視野はいかに狭隘かがわかる。つまり、人間は個人として単純な生き方をしているというよりも、社会的存在であること（つながり、社会性）を積極的に意識して人間と社会を理解する視点が経済学にまず不可欠といえるのではないか。そうした理解を延長すれば、人間は単に利己心だけを持つ存在というよりも、利他心をも持ち合わせる存在であること（むしろその程度に関しては多様な議論がありうる）も視野にいれた人間観に立脚することが欠かせない。

現代経済学に必要な第二の点は、経済学の始祖とされるアダム・スミスが主張した人間観と社会観を改めて認識する必要がある、そこにやはり大きな意味があると考えられることだ。スミスと言えば『国富論』、そして「われわれが夕食にありつけるのは、肉屋、酒屋、パン屋の慈悲心のおかげではなく、彼ら自身の利益に照らしてそうだからである」という表現を引用し、自己利益の追求の結果「見えざる手」によって社会全体の利益が推進されることを主張した、という理解が一般的である。しかしスミスには、もう一つの名著『道徳感情の理論』があり、ここでは人間の道徳つまり社会性が詳細に議論されている。こうしたスミスの議論を総合的に捉え、それを現代的に表現するならば、社会は分業によって構成され機能することを改めて重視する必要がある。また、人間には利己性だけでなく利他

性（人間相互のつながりないし社会性）も併せ持つこと、そしてそうした人間観と社会観を基礎にスミスは人間のウエルビーイングを考察したのだ、と理解する必要がある。

### 三、この十五年間におけるヒューマンミクス追及

以上のような発想をもとにすれば、経済学のあり方を捉え直すこと（できれば再構築すること）が必要ではないか。筆者は、ここ二〇年来こうした考え方を次第に抱くようになった。大学時代には、マルクス経済学と対照的な「近代経済学」に憧れた。その後、金融業界に勤務したため、実に四〇年間、新古典派経済学に親しんできた。このため、その経済学から脱却するのは容易なことではなかったが、色々な契機や偶然がありそこから脱却する必要性を強く感じるようになった。<sup>(注三)</sup>そして、最近十五年間は、幅広い人間性と経済学を結びつける作業こそ自分の仕事ではないかと思うようになり、幸いにもそれに邁進することができた。その試み（チャレンジ）には三つの段階があった。

その第一段階は、二〇〇九年の論文<sup>(注四)</sup>にはじまる八本の論文をもとに先ず「人間性と経済学」<sup>(注五)</sup>を刊行することをもつて一応終結した。ただし、これはあくまで「人間性」と「経済学」の関連を種々論じたものにとどまった。そして当時の勤務先大学で最終講義の機会を与えられた際には、経済学には人間性をもっと重視する新しい方向が必要だと同僚教員に訴えるところにも、それを具体化することが自分にとって今後の課題だと宣言した。<sup>(注六)</sup>

このように位置付けた研究の第二段階は、その後執筆した論文（合計十六本、延べ一〇以上の学会で発表）をもとに昨年『ヒューマンミクス—人間性経済学の探求』（挿入図を参照）を刊行することができた。なお、ここでは前書のように単に「人間性」と経済学の関係を論じるのではなく、人間性を経済学にかかる形容詞としており、前書から

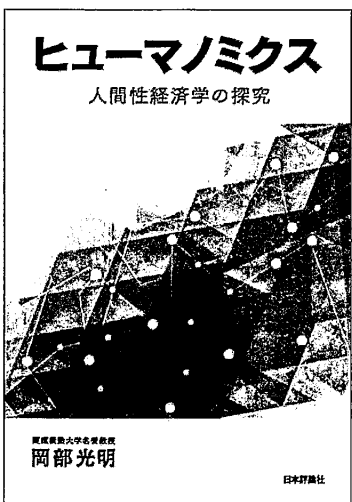
著者なりに研究を進展させたことを示唆している。

この書籍の論点は、当然多岐にわたるが、とりわけ二つの主張をしている。第一は、主流派経済学の枠組み（社会は「市場・政府」の二部門で構成されているとする理解）に代えて、新しい理解の枠組み（社会を構成するのは「市場・政府・非営利部門」の三部門だとする視点）を提示するとともに、それを経済政策論ならびに社会厚生論の視点からそれぞれ証明を与えたことである。第二は、社会は分業によって構成されるので個人（市民）がそれぞれその使命を果たすことは、社会にとっても個人にとっても幸福の所以であること、さらに、個人の生き方（使命達成）によるウエルビーイング向上を導くうえで日本発の実践哲学が近年提案されていることの紹介である。

そして研究プロセスの第三の段階は、上記の日本語版『ヒューマンミクス』の内容をおよそ三分の二に圧縮した英

<sup>(注七)</sup>語版を刊行することである（目下英国の出版社と交渉中）。ち

なみに、二〇〇〇年以降刊行された国内外の学術書のうち、「ヒューマンミクス」という言葉を書名に含む書物が何冊存在するかを調べると、日本語原著では上記拙著のみである。一方、海外では英語で三冊、ドイツ語で一冊存在する（後者には邦訳あり）。しかし、これらの洋書四冊の内容を達観すれば、経済学はアダム・スミスあるいは他の学問領域で見られる幅広い人間観をもっと積極的に取り入れる必要性があると主張するにとどまっている。このため、上述した拙著のようにその視点



昨年刊行した研究書

を理論的に議論した事例は国内外に未だ見当たらない。この点で拙著には新規性があると考えている。

#### 四 現在の心境——ロングフェローの詩

以上が、筆者のこの二十年間における研究の足跡である。それは、拙著の英語版の刊行をもって締め括ることになる。すでに八十歳になる一研究者としては、これ以上のことを行う知力も、勇氣も、もはや残されていない。

そしていま思い出すのは、一九世紀アメリカの詩人、ヘンリー・ワズワース・ロングフェローの有名な詩である。高校二年生の時（六十二年前）の教科書に載っていたこの詩だが、それを当時の英語の先生がクラスに向かって朗々と読んでくれたことが耳に残っている。それを、いまなぜかわからないが思い出し、頻繁にその詩を口ずさんでいる。英語原詩は次のとおりである（下方は岡部邦訳）。

I shot an arrow into the air. 私 は 空に向けて矢を放った。

It fell to earth, I knew not where. それは地に落ちた。がその場所は分からなかった。

For, so swiftly it flew, the sight なぜなら それは敏速に飛んだため 私の視力では

Could not follow it in its flight. その飛翔力を追えなかったからだ。

I breathed a song into the air. 私は 空に向かって大声で歌をうたった。

It fell to earth, I knew not where. それは大地に吸い込まれた。がその場所はわからなかった。

For who has sight so keen and strong, 果たして 誰がそれを追えるほど鋭く強い聴力をもって  
That it can follow the flight of song? 歌の飛翔を追えようか。

Long, long afterward, in an oak 長い 長い 年月の後、私は樫の木に

I found the arrow, still unbroke. 突き刺さったあの矢を見つけた。未だ折れ曲がっていない状態で。

And the song, from beginning to end, そして あの歌の初めから終わりまでの全部を

I found again in the heart of a friend. 私は 再び友人の心の中に見いだした。

原文は、具体的な場面を描きながらも、そこには深い意味が込められたとても印象に残る詩である。そして、リズム感があるうえ、この詩は英文詩に要請される韻を見事に踏んでいる（エア、ホエアや、サイト、フライトなど）。全くの余談だが、この詩の日本語訳はかなりの数が存在するが、意味を的確に表現するだけでなくリズムミカルな邦訳（定訳）は自分が調べた限りでは見当たらなかった。むしろ、英語の原詩に対応する韻を踏んで邦訳を作るとは英語と日本語の文章構造の違いから原理的に不可能であるが、原詩の意味を正確に訳しつつ何とかリズム感を出すかたちで原詞を日本語に置き換えることを試みてみた。その結果が下欄に示した和訳である（視力、飛翔力、聴力などの語によって共通のリズム感を醸成してみた）。

もう十五年以上も前のことだが、上記拙著を構成する論文をある学会で発表したとき、見知らぬ若手研究者から「このような領域にとっても関心がある、自分もこうしたチャレンジをしてみたい」といった感想をもらったことがあ

る。とてもうれしいことであった。筆者はこのような肉声を今後直接耳にすることはもはや期待できないが、日本あるいは世界のどこかで拙著をみてくださり、上記の詩に歌われたように共感する部分を誰かに見出してもらえるならば、とても幸いだと思っている。

- 注一 アカロフ&シラー(二〇一七)『不道德な見えざる手—自由市場は人間の弱みにつけ込む』東洋経済新報社。
- 注二 Waldinger and Schulz (2023) *The Good Life: Lessons from the World's Longest Scientific Study of Happiness*. Simon & Schuster.
- 注三 岡部(二〇一八)「主流派経済学への異論申し立て」『経友』二〇二二号。 [https://okabem.com/essay/Objection\\_essay.pdf](https://okabem.com/essay/Objection_essay.pdf)
- 注四 岡部(二〇〇九)「経済学の新展開、限界、および今後の課題」明治学院大学『国際学研究』36号。 <http://hdl.handle.net/10723/1401>
- 注五 岡部(二〇一七)『人間性と経済学—社会科学の新しいパラダイムをめざして』日本評論社。
- 注六 岡部(二〇二二)『現代経済学を超えて—私の経歴と考え方の発展(明治学院大学最終講義)』慶應義塾大学出版会。
- 注七 Okabe (2024) *Humanomics: An Alternative to Mainstream Economics* (forthcoming).

(昭和四十三年経済学科卒、慶應義塾大学名誉教授)